行政書士しが

発行所　滋賀県行政書士会
発行人　井上超由／編集人　奥野慎太郎
所在地　滋賀県行政書士会館
〒520－0056
大津市末広町２－１（ＪＲ大津駅前徒歩１分）
TEL(077)525-0360・FAX(077)528-5606
E-mail：shigakai@gyosei-shiga.or.jp
URL：http://www.gyosei-shiga.or.jp/

あきらめの夏

公益事業部長　玉山　国雄

王朝時代、殿上に集まった公卿らに振る舞われる膳を「椀飯（おうばん）」といった。江戸時代には、正月に親類などを招いて宴を開くことを指すようになり、一般にも広がった。気前の良さを表す「大盤振る舞い」の語源である。そんなことをとあるコラムから教えられた。

現在行われている政府や自治体による「新型コロナウィルス禍」に対する様々な支援策は、まさに「大盤振る舞い」といえよう。国の目玉施策としては、国民一人当たり10万円が支給される特別定額給付金をはじめ、持続化給付金、家賃支援給付金あたりだろうか。これら以外にも各自治体で独自に支援制度が講じられている。

なにしろ申請すれば最大200万円とか600万円とかのお金をタダでくれるというのだから太っ腹な話である。しかもそのハードルはかなり低い。下世話に言えば、貰わにゃソンなのである。

しかし、その原資はどう説明したところで、結局は何かを先食いしているのだろうから、いずれどこかで帳尻は合わされるはずだ。なにしろ国の財政は慢性的に逼迫している。お題目のように叫ばれる「財政再建」の四文字は、もはやこの国の国是といってもよい。

ひょっとして将来の大増税の口実にでもなったら、嗚呼なにをかいわんや、である。

古今東西ウマイ話にはウラがあるのだ。世間一般の実践型経済学によれば「ただほど高いものはない」というのが通り相場である。ほら言わんこっちゃない、そう考えて間違いない。無いものは、無いのだから。

つい10年ほど前にも高速道路無料化や子ども手当など夢の“効能”を並べた「マニフェスト」が日本中を席捲した。役所の無駄を削れば財源なんていくらでも出てくる、がうたい文句だったが結局ウソだった。

ま、そんな「古傷」はそっとしておくとしても、支援給付金を手にして「ただほど安いものはない、エイホーヤッホー」と快哉を叫んでいるとしたら、なんともおめでたいかぎりだ。ゆめ油断めさるな。

さはさりながら、この「新型コロナ禍」でお店が休業に追い込まれたり、会社をリストラされたりして、日々の生活にも事欠くほどに困窮困惑してお先真っ暗な人たちがたくさんいるということも事実である。

水に溺れてすでに口も鼻も水没している人を目の前にして、「ピンチはチャンスだ」的な成功譚なんかこの際なんの助けにもならない。いま必要なのは、ひと息継げる浮き輪であり引き上げるロープである。説教やゴタクをならべているヒマはない。

支援給付金が、本当に困っている人たちにとって干天の慈雨ならんことを祈るばかりである。

「新型コロナ禍」に対する国や自治体の多様な支援制度は困っている人たちにとってはうれしありがたしであるが、問題は各省庁自治体各課それぞれがバラバラに支援策を講じていることで、どこにどんな支援制度があるのか一元的にわかりにくいことだ。せっかく知恵を絞って作り上げた支援制度だ。やった感だけで終わるとしたら気に入らない。

周知のとおりだが、滋賀県行政書士会では滋賀県から委託を受けて7月17日から「新型コロナウィルス感染症支援制度相談窓口」を開設している。県の支援策だけではなく国や市町の支援策も含めてワンストップで一元的に情報提供することで、「コロナ禍」で困っている県民や事業者の不安を安心に変えられるよう支援を行っている。連日二人体制で年末まで実施の予定だ。

支援制度の多くはネットで検索できるのだが、高齢者などネット環境から距離のある方や、どうしても申請の手順がわからないという方などには、要望があれば訪問支援も実施している。ことほどさように、行政だけでは入り込めない地域のひだのような部分に分け入って、相談者により添いながらの支援を行っている。

今夏、相談窓口はお盆休みを返上して連日対応にあたった。滋賀県はベストを目指している。一方、滋賀県行政書士会も全力をあげて県の要請に応えている。そこには頑張ってる匂いがする。

これこそ、行政書士の真骨頂であり、面目躍如である。いささか面はゆくもあるが自慢としたい。

思えば、お祭りムードの中で幕を開けた令和の改元だった。東京オリンピック開催など「新しい時代」が華々しく演出されたが、しょせん幻想にすぎなかった。

以前にも述べたが何度でも言おう、すでに日本は下り坂を下りている。少子高齢化による人口減の「縮小社会」である。江戸末期から成長し続けた我が国の人口は、2008年の1億2808万人がピークであった。2011年にはGDP世界2位の座を中国に譲った。子の貧困に虐待。最低賃金や人手不足。バイトテロ。若者より多い中高年の引きこもり。高齢者の運転事故。あおり運転。京アニ放火殺人事件。ヘイトスピーチ。戦後最悪と言われる日韓関係。そんな事々が令和幕開けの舞台裏だった。加えて、消費増税による景気減退への陰々滅々とした不安もあったはずだ。

紙コップのコーヒーを持ち歩く習慣やコンピューターとにらめっこするような習慣が見慣れた風景になったように、外出時にマスクを着用する習慣やスーパーの入り口で手指をアルコール消毒する習慣にも違和感がなくなった。世の中は一変した。強烈な閉塞感の中で、世の中は無分別に一方向に走りがちで、トゲトゲしく息苦しくなった。

花火大会も甲子園の大歓声も帰省ラッシュもなかった、短い今年の夏が終わった。あきらめの夏だった。

延期された「東京オリンピック」の行方を知る身ではないけれど、今年の夏やれなかったことを、来年の夏はやり返してほしい。

やられたらやり返す、倍返しだ。夏物語は終わらない。